

抱きしめるように荷物を抱え、知り合いとすれ違わないように細心の注意を払いながら屋敷へと戻る。わたしの姿が目に入ったらしい使用人が近寄ってくるのに気が付かないふりをして階段を駆け上がり、ベッドの下に本を隠す。まるで艶本を隠す思春期の男子のようだと苦笑いしてしまうが、ほかにいい場所を思い浮かばないので仕方がない。

ふうと息を吐き出してからすぐに、扉をノックする音が響く。部屋に入る許可を出せば、山羊のような角が頭から生えた少女が顔を覗かせた。

「奥様、今日は少し肌寒いですから紅茶を淹れましょうか？」

「ああ、ありがとう。お願いする」

小さく頷いて扉を閉める少女を見送ってから、隠していた本の表紙をまじまじと見た。

「……どう考えてもわたしとあいつだよな」

露店で売っていた本には夫と思しき尖った耳の魔族に、屈辱の表情で頬を染める女騎士が描かれている。

悪趣味だなと呟きながら、わたしは視線を逸らせなかった。

長きにわたって戦争を続けていた人間と魔族が和解したのはたった一年前のことだ。お互いに疲弊していた両者は、長年の溝が嘘のようにあっさりと停戦した。そこで持ち上がったのが魔王軍の幹部と、勇者パーティーの男女の婚姻話だった。

陣営の旗印として名を馳せた彼らが結婚すれば、和平の象徴になるだろう。

とはいっても、一国の王子で、自身の息子でもある勇者を差し出す気は国王にはない。次に白羽の矢が立ったのは聖女だが、彼女と魔族を結婚させることは教会が承知しなかった。しかも聖女の力は清らかな乙女しか使えないという伝承がある。万一に停戦が破られたときのことを考えれば、どうするのが一番よ

いかは自明の理だったのだろう。

「となると、エレノアしかおるまい。引き受けてくれるな」

「は、そのような大役、わたしに務まるかどうか……」

勇者パーティー全員で王の御前に呼び出された時点でいやな予感はしていたが、どうやら国王や大臣たちの間ではもうとつくに誰を魔族と婚姻するかは決まっていたらしい。

「謙遜せずともよい。華麗な剣術で大の男を倒すお前のことだ。魔族の手綱を取るのもたやすいはずだ。それに今のお前には断る理由がなからう」

王のそばに控えている大臣が、見透かすようにわたしを見下ろす。魔王討伐の旅に出立する前に婚約した伯爵家の跡取りは、命がけの旅から帰ってきたわたしを歓迎してはくれなかった。旅に出る前より日に焼けた肌や髪を軽蔑するように一瞥した。冒険の途中で、荒れた酒場や宿屋に訪れたとすると、何も間

違いなど犯していないのに人を淫売だと決めつけた。頭に血が上って思わず剣を抜きかけると、後日あちらから婚約を破棄する旨の手紙が届いた。

目端がきく大臣のことだ。わたしの婚約が破談になったことを知っていて、断る理由がないといっているのだろう。

たしかに無用な血を流すことは避けたい。しかし、顔も名前も知らぬ魔族の男に嫁げと命令されて、その場ですぐに頷くことにはためらいがある。

「エレノアさん……」

逡巡していると視線を感じた。苦楽を共にした聖女が、一歩進み出ようとする気配を感じる。異世界より召喚された彼女に、これ以上の負担をかけたいとは思えなかった。

「……ユカリ、下がってろ」

わたしは彼女を制して、王の前で跪く。

「エレノア・フォン・アルノス、陛下の勅命しかとお受けいたします」

深々と頭を下げるわたしに、宮中のどこからか自然と安堵のため息が聞こえてきた。

承諾してからあれよあれよという間に婚儀の準備が整い、あつという間に当日を迎えた。

柄にもない贅が尽くされた純白のドレスに身を包んだ姿を鏡で見たときは、自分とは思えないほどに美しかった。しかし、結婚相手がどこの馬の骨ともしらぬ魔族だと、着飾ったことさえ空しく思える。

婚儀の際の引き渡しは、お互いの国境近くで行われた。馬車から降りれば、人と魔族問わず多くの見物客でごった返した街道に面くらう。下手なことはできないと気を引き締めて、事前に控えている魔族の馬車へと向かう。

臆したら負けだと、目の前を睨みつけながら歩を進めれば鷹揚とした声が響

いた。

「おやおや怖い怖い。敵対していたところとまるで変っていないじゃありませんか。まあでも、あなたはその顔の方が魅力的ですよ」

血を浴びたような赤みがかった黒髪をした男は、人を食ったような笑みを浮かべてこちらを見据えた。その切れ長の真紅の瞳をした男にはたしかに見覚えがあり、わたしは思わず小さな声を上げた。

「クロウディアス……、わたしの夫になる男とは、お前だったのか……」

「おやエレノアさん、もしかして知らなかったんですか？夫となる男を事前に明かさぬまま嫁がせるなど、人間とは存外野蛮なんですねえ」

相も変わらず人を小ばかにしたような話し方に思わず苛立ってしまった。目の前のいかにも文官じみた風体の細面の男ことクロウディアスは、魔王の腹心だった。幾度も戦場で剣を交わしたが、いつもいいように翻弄されて一太刀も

浴びせたことがない。

何度も会ううちに妙に気に入られてしまったらしく、戦いながら「人間は嫌いです、エレノアさんは好きですよ」とか「脆弱な人間に与えるにはもったいない。私のお嫁さんになってください」などと本気か冗談かわからない言葉を幾度も囁かれたことを覚えている。

「まさか本気だったとは……」

嘆息するわたしに、若い魔族の男はつうとレースのグローブ越しに手をなぞる。

「あなたのこと、ずーっと私のものにしたいと思ってたんです。戦場で私に敵わないと知りながら何度も向かってくるあなたは本当に美しかった」

大勢の見物人が周りにいるなかで、熱っぽい声が耳元を撫でる。ぞわり、と背中が粟立ってなんともいえない気分になりながら手を払いのけようとするが

びくともしない。

「相変わらずお転婆ですね♡でも、ダメですよ。みーんな見てますからちゃんと口づけを受け入れていただかないと♡」

「っ……」

和平のための結婚ということで、一般民衆の見学人も大勢いる。わたしの一挙一動が皆に注目されているのだ。それになにか下手なことをすれば、魔族への悪感情が高まりせっかくの停戦を崩壊させるきっかけにもなりうる。

「ちっ、早く済ませろ、クロウディアス」

「ええ、そのつもりです。動いちゃだめですよ♡」

人肌よりも少し冷たい唇が、両頬に交互に触れる。ぴくっ♡と思わず指が震えると、骨ばった指が絡んできた。

「あまりかわいい顔をしないでいただきたいですね。こんな儀礼的なキスでは

すまなくなつてしまいますよ？」

「なっ……」

「ほら、こうやってからかうとすぐ顔を赤くする」

頬を手で押さえたまま睨みつけていると、腰を抱かれて「ほら、笑って皆さん！ 手を振らないと」と促される。たしかにこれから和平のために結婚する花嫁がずっと不満顔で夫を睨みつけていては外聞が悪い。わたしは湧き上がってくる文句を何とか抑えつけながら、ぎこちない笑顔で民衆に手を振った。

結婚した経緯を思い出して、もう一年も経ったのかと感慨深くなる。夫となったクロウディアスは人を食ったような笑顔は変わらずとも、思いのほか優しく接してくれた。一年を通じて寒冷地である魔王領では、生の果物などは手に入りにくい、どこから調達して振舞ってくれる。おそらく、わたしが好む食事を出すようにと使用人に言いつけてくれているに違いなかった。丁寧扱われているのは夜も変わらずで、すっかり愛される悦びを知ってしまった。しかしささか丁寧すぎる愛撫に物足りなさを覚えていたころ、露店で自分と夫によく似た絵姿が表紙の本を見つけた。故郷でも時折王室の権威を侮辱するために猥雑な内容で風刺していたから、そういった類のものだろうと購入した。場合によっては国際問題だ。

本は何冊か購入したが、そのどれも内容は口にするのも憚られるものであった。なかでも多かったのがいまだ敵対している自分と夫が争い、敗北し無残に

犯されるという内容だった。

——殺せ、といったわりにここは嬉しそうに私のを締め付けているじゃありませんか。

——魔族の種なんて孕みたくないとおっしゃってましたか？こんなに吸い付いてくるくせに。

書物のなかの夫は徹底的にわたしを辱め、犯し、精を注ぐ。こんなひどい扱いをされたことなどないのに、きゆう♡とお腹の奥が疼く。

「こ、こんなものいったいどの不届きものが書いたのやら。はやくクロウディアスに言って取り締まってもらわなければ……」

誰もいないのに言い訳するように呟きながらも、ページをめくる手が止まらない。気づけば身動きが取れずに無理やり種付けされるところまで読んでしまった。

「あう……♡」

もじもじと太ももを擦り合わせながらページをめくろうとした瞬間、指をぎゅっと握られた。

「エレノアさん、何を讀んでるんですか？」

妄想にしてはやけにクリアな声が耳元で響いて、素っ頓狂な声を上げてしまった。

「ひあっ！」

「おやおや、これはあなたと私ですか？ なかなかいい趣味ですねえ」

取り上げた本をパラパラとめくりながら、クロウディアスは声を弾ませる。

「しかしひどい本ですね。私はもーっとエレノアさんのことを大切にしていますよ？」

長い指がくすぐるように耳たぶを撫でて、ぴくん♡と肩を震わせてしまう。

「やつ♡」

「おや、かわいらしい声ですね。そんな風に誘われたら、我慢できなくなってしまう♡」

薄い生地 of 寝巻の上から少し立ち上がりかけていた乳首をきゅう♡と摘ままれる。ふっ♡と熱く湿った息が勝手に漏れれば、クロウディアスは愉しそうに笑った。

「ひょっとして自分が書かれたエッチな本見て興奮しちゃったんですか？」

「ち、ちがう！こんなふう to 侮辱されて、怒りに震えてたんだ！」

自分でも苦しい言い訳をすれば、ふうんとクロウディアスは切れ長の瞳を細めた。

「愛するあなたを侮辱したら輩を放ってはおけませんね。作者を見つけたら真っ先に処罰しなければいけません。不敬罪で火あぶり、それとも……」

どこまで本気かはわからないがおそろしい刑罰を並び立てるクロウディアスに、わたしの方が慌ててしまう。

「そ、そこまではしなくても……」

「じゃあやっぱり少し興奮しちゃいました？」

少し汗ばんだ胸を撫でられながら、押し黙る。双丘をやさしく揉みしだかれながら乳首の側面をすりすり♡と指で擦られると、あっという間に乳首が固くしこつてしまう♡

「んん♡」

「私は興奮しましたよ♡よく似たような妄想であなたを汚してましたから♡私を睨みつける顔が快楽に蕩けて屈辱に震えながら私のチンポをねだるエレノアさんを想像してなんと抜いたことか♡」

「なっ……！なにいつてるんだ、変態！」

突然の告白に夫を振りほどこうとするが、ちゅっ♡と耳たぶに口づけられて力が抜けていく。

「んんっ♡」

「ね♡エレノアさん♡敗北無様セックスしましょ♡ちゃーんとおかしくなるくらい気持ちよくして差し上げますから♡」

いつもやさしいクロウディアスに、無理やりカラダを暴かれていくくらいやだと拒否しても絶頂させられる。想像しただけで子宮が下がりそうな提案だった。「っ、おまえが、やりたいっていうから仕方なく付き合ってやるんだからな……!!」

上目づかいで睨みつければクロウディアスは幼子の抗議をたしなめるように穏やかに笑った。

さっそくクロウディアスは、昔使っていたという屋敷の地下室への階段を下

る。これから迷宮の探索や魔物退治でもできそうなくらい完璧に武装したわたしがその後ろをおとなしくついていった。昔は捕虜を閉じ込めるときに使っていたらしく、空気がひんやりとして少しじめじめとしている。あまい香を焚かれた清潔なベッドでしか抱かれたことがないので、こんな場所で抱かれてしまうのかと想うともう興奮してしまう♡

「エレノアさん、お口開けてください」

「？」

いうがままに口をあければ、なにか甘い液体を飲まされる。どくん、と大きく心臓が脈打ってから夫の姿を見ると、昔固く魔族を悪だと信じていたころの記憶が鮮明に蘇ってきた。

「なんだ、これ。お前を愛おしいと思う気持ちと、叩き斬りたいという気持ちぐるぐるして、気持ち悪い……」

困惑しながら問えば、いわゆる惚れ薬とは真逆の憎悪薬とでもいうべきもので、誰にでもある家族や近しい人への小さな不満を大きく増長させるものらしい。

「なんだってそんなものを」

「だって、せっかく屈服していただくのにすぐに甘い声で鳴かれたらつまらないでしょう？ エレノアさん、なんだかんだで私のこと大好きになっちゃってますからねえ♡このくらいでちょうどいいと思いませんか？」

何もない空間から杖を取り出して、身の丈ほどあるそれを軽く回して構える。そうだ、いつもこうして人を食ったように笑う昔の夫に、ひどく腹が立っていたのを思い出した。

「さあエレノアさん、どこからでもかかってきてください」

挑発するようにつこりと微笑まれた瞬間に、足が床を蹴り上げる。実戦は

久方ぶりだが手に吸い付くような柄の感触からして、自分の腕は錆びついている。思い切り懷めがけて剣を突きだせば、カキン、と硬い感触に弾かれる。

「ちっ……！」

舌打ちして距離を取るために飛びのこうとしたところで耳元に呪文を囁かれて、ぐるりと世界が回る。

「あっ……」

めまいを覚えて、一瞬身体の力が抜ける。その隙を狙ってぐいと腕をひねり上げられて、思わず剣を床に落としてしまう。

「勝負ありましたね、エレノアさん」

「くそっ……、呪文をつかうなんて」

「本気でやらないとつまらないでしょう？」

いつもの甘ったるい声も葉を盛られたせいか神経を逆なでされている気がして、

イライラとする。

「負けちゃったエレノアさんには勝者のモノになってもらいましょうか♡」

床が朧げに光り、冷たい床からなにかうごめくものが這い出てくる。それが触手だと気が付いてひっと小さい悲鳴を上げてしまった。

「くっ、そんな気持ち悪いモノに好きにされるくらいなら」

『殺された方がまし』ですか？」

抵抗しても無残に犯されてしまう悪趣味な書物のセリフをクロウディアスに引用されて、きゅん♡と子宮が疼く。

「そ、そうだ……！辱めを受ける気はない……！こ、殺せつ……！」

強制的に呼び起こされた侮蔑を込めてクロウディアスの整った顔を睨みつけると、愉しそうに口の端だけ歪ませた。

「ああ、戦場のあなたを思い出しますねえ♡本当は恐ろしいのに精いっぱい虚

勢を張っていたエレノアさん♡私が最初に犯してやりたいと思ったエレノアさんだ♡」

にゆるんと触手が四肢に絡みつき、カラダの自由を奪われる。みちい♡と思いのほか強く拘束されて、ぞわぞわと背中が粟立った。

「っ、悪趣味な男だな、お前は……！」

わざと憎まれ口を叩けば、カチャカチャという金属音が響き鎧の留め具が外されていく。容赦なく床に散らばっていくそれに、柄にもなく少し不安になる。

「ふふ、いつも見ていたはずなのに心もとない恰好に見えますねえ♡」

鎧をすべて外されて、丈の短いドレス姿になる。

「こんな格好で戦場に出ていたなんて、いまでも心配になりますね♡こんな風に悪い人につかまって、エッチなことをされてしまうかとは思わなかったんですか？」

「ん♡」

骨ばった指がゆっくりと太ももに這わされていく。同時にドレスをめくられて、ショーツがちらりと覗いた。

「あ♡」

ピッタリと恥部に吸い付く薄い布は、ひどく頼りない。少しでも横にずらされたら、おマンコが見えてしまう♡

「ほら、エレノアさん。想像してみてください。今の私とあなたは敵同士。あなたはこれから憎むべき相手に乱暴されようとしているんですよ♡ほら、ちゃんんと堕ちないように頑張ってください♡」

「わ、わかった……」

小さく頷いてからわたしは目の前にいる男は愛おしい夫ではなく人類にあだなす魔族で、憎むべき敵なのだと思い込む。憎たらしい敵に捕縛されて、犯さ

れようとしているかと思ひ込むことで太ももとショーツの境目をなぞる指の感覚に、甘い声を出しそうになるのをなんとかこらえて抵抗する。

「ふっ♡んん♡さわっ、るな！」

「おやおや♡ちゃんとか威勢よくできましたね♡ほら頑張ってください♡感じちゃだめですよ♡いまの私とあなたは敵同士なんですから♡」

ニヤニヤと笑いながら声を弾ませたクロウディアスがゆっくりとわたしのカラダを頭のとっぺんからつま先までじいと視線で撫でる。鎧を着けるときに邪魔だと感じていた胸をじいと視線で犯されて、思わず乳首がツンと尖っていく。

「み、るなっ」

「いやあ♡本当に見れば見るほど美しいですねえ♡」

ぬるついた触手が胸に絡みついて粘液を塗り付けていく。あっという間に生地がじつとりと濡れて、透けて肌に張り付いていった。隙間からにゆる♡と滑

り込んだ触手が、コルセットの紐を力任せに引きちぎったかと思うとクロウディアスの眼前におっぱいを晒してしまった。

「あっ♡」

「おやおや、まだ触ってあげてもないのに乳首ぷっくりしてますね♡まさかこうされたかったですか、高潔な女騎士であるエレノアさん？」

「~~~~っ、ふざけたことをぬかすなっ……！ひゃうっ♡」

わざと羞恥を煽ってくる魔族の男に抗議しようとしたら触手に胸の先端を捉えられる。絨毛がびっしりと生えた、ぬるついた触手♡しっとりと張り付いた触手に乳首を撫で上げられると、ぞわぞわと背中が粟立った♡

「それっ♡やめろお♡」

喘ぎながら睨みつけるとそっと長い指をショーツのクロッチ部分に添えられる。クリトリスを散々可愛がられたときのことを思い出してひく♡と蜜穴が震

えるが、骨ばった指はぴくりとも動かない。

「な、なんでっ♡」

「なんで、ですか？まるでもう触ってほしいみたいな口ぶりですね♡憎たらしい魔族の男に媚びるのが清廉な騎士サマなんですか？」

ふくらみかけたクリトリスに触れている、ごつごつした指♡これに押しつぶされる快感を、カラダが覚えていて、添えられているだけなのにカラダが熱くなる。

「くっ♡くそっ、減らず口をっ♡おお?!♡」

ねとお♡と糸を引く粘液で乳首を包みながら触手が這いずり回る♡得体のしれない糸引く液を塗りたいくられたところが熱い♡じんと疼く突起を凹凸で刺激されると濁った声が勝手に出てしまう。

「ちくびっ♡だっだめっ♡くっ♡」

じんじんと痺れる刺激を逃がそうと拘束された状態で身をよじれば、クロウディアスの指でぐにゅ♡と肉豆を押しつぶしてしまふ♡

「ん~~~~♡ふっ♡ううっ♡」

思わず足を外に開いて踏ん張りながら息を整えるわたしに、クロウディアスがクスクスと嘲るように笑う。

「まったく、こんな敏感なカラダで旅を続けてきたなんて♡心配ですねえ♡これじゃ魔王さまを討ち取るどころか、あなたの純潔が散らされてしまいますよ♡私、あなたのことが心配でたまりません」

「っ、だまれっ！んん♡」

わたしの純潔を散らした張本人である夫が白々しく微笑む。熱くなるカラダをどうにか抑えつけながら睨みつけていると、夫がじいと胸の先端に視線を送る。

「おやおや、触手にいじめられた乳首がぷっくりしてぬらぬら光ってますよ♡
これが魔族にも勇名をとどろかせた女騎士サマの乳首なんですか♡」

どろどろの粘液を乳頭に擦り込むように、クロウディアスの指がぷっくり腫れあがった先端の窪みに押し付けられる♡ぐりぐりぐり♡と指を押し込まれると、ぶるぶる♡と太ももが震えて汗ばんでいく♡

「ぐっ♡ふう♡」

思わず腰をへこつかせてしまうと自分から弱点の肉豆を圧迫してしまう♡びくびく♡と跳ねあがるカラダに屈辱を覚えながら、余裕の笑みを浮かべる男を睨みつける。散々快楽を教え込まれたカラダは従順に熱を持ってしまつて、悔しくてたまらない。葉で夫のことを憎たらしく思わされているはずなのに♡すぐに屈服したくなるなんて♡

「ふふ♡清廉さとはかけ離れたいやらしいぷっくり乳首ですねえ♡こんなに腫

れて、触ってほしいっていつてみたいですよ♡ほら、もっと気持ちよくしてあげましょう」

その言葉が合図のように触手がびとっ♡と両方の乳首に吸い付いてきた。

「なっ♡」

触手の先端がぱっくりとふたまたにわれて、赤く腫れあがった突起を包み込む。

ちゅぽ♡ちゅぽ♡ちゅぽんっ♡ぢゅぽんっ♡

なまあたたかい粘膜に乳首を包まれてぢゅぽぢゅぽ♡と出し入れされる♡乳首を口のナカに入られて吸われたときの感覚ににているけれど、口腔におさめられたときは全く違う。ブラシのようになっているずーっと乳頭に吸い付いて、魔物に犯されているとわかるのに、甘い痺れが全身に広がっていく♡くやしい♡くやしいのにつ♡きもちいい♡

「ふっ♡うぐゝゝっ♡くそっ♡くっそお♡」

唇を噛みながら、腰が勝手に揺れてしまう。ずりゅっ♡ずりゅん♡散々乳首を触手にいいようにされて勃起したクリトリスを、クロウディアスの指に押し付けてしまう♡

「おやおや♡かわいい腰振りダンスですね♡エレノアさん♡無様でかわいいですよ♡」

へこへこ♡と腰を振るたびにぬちゅ♡といやらしい水音が響く♡自分から敗北を望んでいるように媚びる身体に困惑しながら、クリトリスを長い指に押し付けるのとめられない♡

「んん♡クリっ♡きもちいい♡くそっ♡こんなはずじゃっ♡」

擦り付けるたびに肉豆が大きく熱くなっているのがわかる♡ぐに♡と押しつぶすたびに嬉しそうに愛液が垂れて、つま先から頭のでっぺんまで気持ちい

いの伝わってくる♡

「おやおや♡泣きそうなくらい気持ちいいって顔で私の指でクリオナしてるじゃないですか♡乳首を触手にシコシコされながらクリオナきもちいいですか？」

「おっ?!おおうっ♡ちくびっ♡触手でほじりゅなあ♡」

びっしりと生えた突起が乳頭の窪みを捉え、ぢゅぽぢゅぽと乳腺を刺激しながら強く吸い上げる♡ガクガク♡と太ももが震えて、ぷしっ♡と透明な液体が噴きあげた。

「あ♡あ♡あ♡」

痙攣してくったりとカラダの力が抜けても、触手が四肢に絡みついているせいでその場に倒れ込むこともできない。クリに添えられ続けているクロウディアスの指に、痙攣イキしてるおマンコを押し付けてしまう♡

「おや♡イっちゃいましたね♡エレノアさんのやらしいおマンコがビクビク♡と震えたの私にも伝わってきましたよ♡」

いままでただ添えられていただけだった指先が、クリトリスの大きさを撫でるようにゆつくりと輪郭をなぞる。そして左右から指で肉豆を摘ままれた。

「んお♡ばかつ♡つまむなあ♡」

「おや失礼。ぷつくりしていて必死にアピールしていたものでつい♡」

パンパンに膨れ上がったそれを二本の指で挟み込まれて、互い違いに指を動かされる♡踏ん張るために足を左右に開けば、ガニ股の下品な体勢になってしまう♡

「ふっ♡うづゝゝっ♡」

「触手に乳首かわいがられて、クリトリスもこんなに下品にパンパンになってしまつて♡もう自分から負ける準備してるじゃないですか♡エレノアさん♡な

さけなくてかわいいですね♡」

クリトリスの芯を押しつぶすように指を思い切り食い込まされて勝手に喉が反る♡ぷしゃ♡とぷしい♡と透明な潮がまき散った。まだ乳首とクリトリスしかかわいがられていないのに♡あっという間に恥ずかしい潮をびゅーびゅー♡とまき散らしながらイってしまう♡

「あ♡んあゝゝゝ♡」

へこへこ♡と腰を振りながら、間欠泉のように勢いよく透明な液体がまき散る♡屈辱なのに♡不思議といつもよりきもちいい♡

「くっそ♡チンポに響く下品な声ですね♡勝負だっことを忘れて今すぐぶちこんであげたいくらいですよ♡」

ハチミツのようなどろりとした甘い声が脳を犯す。この声で囁きながら子宮まで種付けされたことを思い出して、キスをおねだりしたくなってしまう。憎

悪薬なんて、ほんとうに効いてるんだろうか♡これじゃほんとうに、わたしが憎い男に犯されたがってる淫乱みたいじゃないか♡くやしいのに♡口のナカがもの寂しくてたまらない♡いかがわしい薬を盛られたというのに、潮と一緒に毒素が排出されてしまったんだろうか。目の前の男を狂おしいほどに求めてしまう♡

「はーっ♡はーっ♡♡」

思わずクロウディアスに舌を伸ばせば、一瞬呆氣にとられたように目を瞬かせた。

「キスっ♡キスしろっ♡」

睨みつけるようにねだれば、ちゅっとなれるだけのキスを落とされる。こんなじゃ満足できないと歯噛みしているとクスクスと夫が笑い始める。

「おやおやいけませんねえ♡あまりかわいいことをしては」

心底愉快そうに笑う夫が片手を軽く上げれば、触手が身体にまわりついたままだった服を勢いよく左右に引っ張る。高く鋭い音がしたと思うと、カラダに纏わりついていていた服が、あっという間に裂かれてしまった。

「あ」

「大好きなエレノアさんに、もーっと意地悪したくなっていますよ♡」

身体を守っていた布がすべて無残に取り払われて、冷たい石の床に投げ出される。その裂かれた布がまるで本当に乱暴されてるようで、またおマンコ濡れてしまう♡

「おやおや、エレノアさんはひょっとして被虐趣味があたりで？いつもより興奮してるじゃありませんか。今度からお愉しみのひとつとして取り入れないといけませんかね？」

長い指が肉土手をふにふに♡と愉し気につつきながら染み出た愛液をすくっ

ていく♡ナカが切なくうずいて、自分で腰をくねらせるがクロウディアスの指は遠ざかっていった。

「っっ♡」

「まだおあずけですよ♡エレノアさん♡私のチンポほしいならちゃーんと敗北宣言して、魔王軍幹部のおチンポでメス堕ちして祖国に背信します♡って誓っていたかないと♡」

「なっ！いい、いえるか！そんなの！」

「そうですか。じゃあまだお預けですね♡触手に遊んでもらいましょう♡」

突起がびっしり生えた太い触手が内腿にするりと忍び込む。思わずおマンコがひくひく♡と震えて、凝視してしまう♡あのイボイボでクリトリスをズリズリ♡って擦られたらぜったいきもちいい♡

「ふっ♡うう♡」

「まったく、なーにがまだ負けてないですか♡負けたがってるザコマンコのくせに♡」

粘液を滴らせた触手が、ずりずりと内腿から這い上がってくる。ブルブル震えるおマンコにたどり着いて、ゆっくりと秘裂を往復し始めた。

「おっ♡?!しゅごっ♡イボイボにクリひっかかってりゅっ♡」

「いったばかりのザコクリ、こんな風に追い打ちされたらたまらないでしょ♡エレノアさん♡クリトリスすっごく弱いでもんねえ♡ほーらザコクリずりゅずりゅ♡」

「ひっ♡にゃああ♡」

愛液と潮、それに粘液ですっかりドロドロのザコクリを触手にびっしり生えた出っ張りでゆっくり刺激される♡凹凸にザコクリが引っかかるたび、脳天にビリビリした甘いしびれが伝わっておかしくなりそうだ♡

「あ♡やあ♡これ♡これしゅごっ♡きもちいっ♡イクっ♡イクう♡これすぐ
イっちゃうのお♡」

「ふふ♡『清廉を装っていてもおマンコには勝てないザコメスなんですねぇ♡』」
本に書かれていた屈辱的な台詞でなじられて、くやしいのにクリトリスが熱く
なって弾ける準備をしてしまう♡追い立てるようにせり上がってくる尿意に似
た感覚に唇を噛んで睨みつけければ無理やり口を開かされた。

「んあ♡にやにしゆるっ」

「噛んだら傷になるでしょう？あなたはわたしのモノなるんですから、許可な
く傷をつけるなんてとんでもない♡」

「あひっ♡あァ~~~~っ♡」